

中世における理性と霊性

K・リーゼンフーバー著／村井則夫訳

知泉書館刊 2008 年



【目次】

序言

序章 現代の中世観

第Ⅰ部 教父思想

第一章 ラテン教父の思考様式と系譜

第Ⅱ部 初期スコラ学

第二章 信仰と理性——カンタベリーのアンセルムスにおける神認識の構造

第三章 初期スコラ学における「理性」の問題——諸類型と諸論争

第四章 十二世紀における自然哲学と神学——シャルトルのティエリにおける一性の算術と形而上学

第Ⅲ部 盛期スコラ学

第五章 人格の理性的自己形成——トマス・アキナスの倫理学の存在論的・人間論的構造

第六章 否定神学・類比・弁証法——ディオニュシオス、トマス、クザーヌスにおける言語の限界と超越の言表可能性

第七章 アエギディウス・ロマヌスの社会・政治思想——『王制論』を中心として

第Ⅳ部 後期スコラ学

第八章 フライベルクのディートリヒの知性論

第九章 ジャン・ビュリダンの哲学における言語理論

第十章 中世の修道院靈性における自己認識の問題

第Ⅴ部 初期ルネサンス思想

第十一章 神認識における否定と直視——クザーヌスにおける神の探究

をめぐって

第十二章 マルシリオ・フィチーノのプラトン主義と教父思想——キリスト
教哲学の一展望
